

# 時代と筆蹟

## 原 子朗

本誌前号に年賀状のことを書いた〔年賀状雑感〕。取りだして見ると、大事な話題なので来年つづきを書く、というふう到最后に書いてある。もったいぶって、そんなこと書かなければよかった。ことしは、ほかに書きたいことがあるのに。誰も去年のつづきなど期待してないだろうけれど、しょうがない、題はちがうが去年のつづきみたいを書いてみる。

しかし早いなあ、もう一年たつのかと、まるまる一年前の自分の文章を見ながら思った。年賀状もおなじで、ことしのを束にして来年必要だからと思って机の下にほうりこんでおく。するともう来月みたいに来年がくる。曆こひもおなじで、むかしは毎日ながしてゆく日めぐりこよみが神棚のそばな

んぞにつるしてあった。今もお西まさまの屋台では売っているが、一般には流行していない。あれを今使ったら一時間おきにめぐっているみたいな錯覚をおこすのではないかしらん。今は月めぐりか、ふた月めぐり、いっそ一年一ながめの年めぐり（つ）がふさわしい。私など年めぐり専門だ。

年賀状もオリンピックみたいに四年に一度交換する、字の巧拙など問わない、参加すること、つまり出すことに意義がある、二年前に売り出して、一年前にポストに入るとしても、翌年の年賀年ねんに相手に届けられる、というふうにすれば、少しは世の中がゆったりするのではないか。平均寿命がのび、毎年つきあひも多くなれば、それだけ年賀状地獄も深刻化しよう。私の尊敬す

る先輩で、二千枚もの年賀状を律氣りきに根を つめて書いて、書きおわたとたん息を引 きたつたひとがいる。笑いごとではないの だ。そのためせつかくのその年賀状は一枚 も出されずじまいになった。中には自分 にあてて書かれた、いわばその壮烈な絶筆 を、ぜひにと遺族に懇望するひともいた。 せつかく懇望したのに、自分あての絶筆は なく恥をかいたひともいたらしい。せつな く懇望になったひとは、あくまで律氣なそ の筆蹟が、しかし年のわりにはおそろしく 悪筆なのに、あらためて感動し、涙をなが したひともいたそうだ。それらを聞いて私 は遺族に懇望しなかつた。すると、あいつ は薄情だ、高ぶっている、と私のかげ口を たたく者もいたという。そうなると、年賀 状は悲劇どころか、もはや人の和をみだす 悪の根源ではないか。

さて、年配者が自分の悪筆をいまさらば やいてみてもはじまるまい。かといつて無 神経に居たない字を相手に投げだすとい うのでもなく、あるがままに心をこめて、 少しは羞恥心も忘れず字を書けば、それが かえって相手の感動を呼ぶということだっ

であるだろう。なにも年賀状にかぎったことではないのだが、自分という個性が字を書いているのではなく、時代が——筆蹟美の様式などつくに喪失して久しい、内外ともに落ちつくひまなく動乱に明けくれ、育ってきた自分たちの時代が、自分にこんな字を書かせている、総じて落着きのない、不安定な、乱暴で殺戮的な書体を。そう思えばよい。あとはわずかな個人差なのだと。そう思わないで悪筆を妙に個人の責任や悪徳と思い、個人的に恥じたりする間違った個性主義が、ますます悪筆を見苦しいものにしたたり、筆不精にしたりしているのではなからうか。相身互いではないか。たとえば古典を研究している国文学者の悪筆も、漢詩文の美を追究する漢学者の悪筆も、筆順のでたらめも、なんら専門ゆえの差別をうけることなく、かくして年配者の筆蹟は皆平等、ということになるだろう。

近ごろの若者たちは、ことばを知らない、礼儀を知らない、などと年配者たちは、あまりいわないがよい。自分たちだつてそのころは、字が下手くそだ、無気力なくせに落着きがない、などとしきりに當時の年配者たちにいわれてきたのだから。さしあたり筆蹟のことだが、私の見たてでは、今の二十代の若者たちの書く字は、総じて読みやすくなつてきている。ここでも個人差は取りはらつてのことだが。

無味乾燥なりに、無個性なりに、とにかく読みやすい文学づらを見せてくれる者が、ひとむかし前より多くなつた。これもやはり時代のせい、時代が書かせていると考えて間違いない。昨年の私のこの文章で、ひとくちにマンガの影響と私はいったが、マンガにそれほど熱中しない連中にも、その影響は自然に浸透していて、たとえば大学の随所に見かけるタテカン（立て看板）の文字の画一的な、しかし読みやすくはある書体を、頭に思ひうかべていただけの方も多いためであらう。クラブ活動の掲示、ポスター、手づくりのコピーによる彼らのリトルマガジンなどの現代風の書体を。マンガも今は会話の風船玉の中の字が手書きなのは、むしろクラシックで少なく、多くは活字になつてしまつたけれど、ひところの手書きの時代の影響は大きく、もはやマンガはなれして、今やひとり立ちの現代書体、

あるいは書風を、時代的に若者たちに形成させてきているといえるようだ。

これを好意的に総括しよう（若者たちは無意識なのだろうが）自分の考えを、より正確に相手に伝えようとして、読みやすい画一的な字を書いている、といえるかもしれない。画一的な生活と生涯を押しつけられていながら、あたかもそれに手向かうように、あるいはせめて自分の考えだけは正確に伝わってほしいと願っているのかのような、個性的な字ではないのに個人の主張を明確にしようとしている、そんないじらしさと複雑さが、一見単純な若者たちの時代の書体にはある。ボールペンで一字一字切りはなして書く、あのもりそばないしマカロニぶつちぎりふうの字の書きかたには。急いで書いても一字ずつころころと丸まり、自閉して、野山に見る野ウサギやリスやイタチのウンコのいちれつ！ 第一、年賀状一枚にしても、彼らは暇にまかせて、たつぷり時間をかけて、似たようなマンガを考案し、そうした文字を並べている。四十代以上の年配者にそんな時間があつたらうか。